

生活指導における言語と行為

とに関する研究

お茶の水女子大学 松村康平
西南女学院短期大学 桐井玲子

研究目的 本研究は幼年期における子どもの発達段階に即した言語と行為との関連づけによる生活指導の一方法に關しての基礎的研究であり、具体的事物の動きに即応して展開される言語活動と言語活動に即して展開される具体的事物の動きとの關係に關する一研究である。本研究の目的は、他人からの働きかけにおける言語をどのように行為化することができるか、また、事物の動きに即してどのように言語活動を展開することができるかを解明することにある。

研究方法 (1)実験材料 家族人形として高さの異なる白色円錐型4個。(最小、高さ4cm。最大、高さ7cm。)この抽象的な人形を、父、母、兄、妹と任意に選択命名することによって具体性をもたせ、これによる人形あそびを展開させる。

(2)実験方法 a、行為↓言語化の実験、b、言語↓行為化の実験、c、aとbを併用した実験。

(3)被験者 幼稚園児男女各20名、小学生(2年生)男女各20名、計80名。

結果の考察 幼児においては、具体的事物の動きに即して概念的な考察を正確にするというよりも、具体的な動きの中で思考し、こ

るといえよう。あたえられた言語を理解して行動にうつすことは、小学生の方が速い。 $[F(2) = 15.54, df = 1, P(0.05) = 6.64]$ 。しかし、行為の言語化は幼児の方が速い。 $[F(2) = 28.2, df = 1, P(0.05) = 6.64]$ 。幼児では、聞くこととおこなうことが関連づけられず、聞く時はきいてしまい、それから行為を始めるので遅くなるものと思われる。小学生については、具体的事物の動きそのものから言語的意味を把握するよりも、具体的事物の動きを一度自分のものとして概念的の世界に位置づけてから、言語表現をするという概念的思考の特徴が考えられる。また、幼児・小学生ともに、生活領域の大部分は、日常生活であり、特にあそびに關するものである。幼児期においては、行動を伴った生活指導の大切であることを、研究結果は示している。

幼児の生活環境と

読書レディネス

大阪商業大学付属幼稚園 土山 汀

目的 幼児の読書力の程度はいろいろとみられるが、幼児が入学までにどれほどの字を読むか、また、生活環境によって、いくらかの差がみられるか、家庭では幼児期の読書力についてどのように考えているかなどについて、それらの実態を知りたいと思ひ調査をおこなった。

調査対象と期間 1、新入学一年生 一四三四名 2、入学前の園児 七一四名 3、新入園児 一四五八名
昭和三十三年二月より三十四年四月まで

調査方法 1、質問紙法 2、テスト調査

主として(阪本D式読書レディネスA号)(WISC、阪本D式、村山式)

調査内容 一、(1)子どもが初めて、読書出来るようになった文字

は、自分の名前の中の一字か頭文字である。

(2)名前がよく読めるようになった時は差が大きい。しかし、兄弟のある子どもは少し早く読み書きが出来るようだ。

幼稚園に行った子どもは、入園して一年〜三年の間にいろいろの方法を通して知る由か、平均数は、あまり変わらない。

(3)字の読めるのは、質問紙法でおこなったのでは、全部読める子どもが新入園児にも多い。しかし阪本D式読書レディネスでおこなった結果は前者と少々異なっている。平均数五五で反対の字(しを左右反対に書くように)と正しい字をはっきり知らないからであろう。

正しい字と解の字、あまり、まちがわれない字とがあるが、日本の数字は知らない子どもが多い。

(4)他のテストとの点の差は大きく、IQとは正比でないことを知る。

(5)子どもは何を通して一番よく知るか、と言えば、絵本、かるた、などが多いようである。

(6)興味をもって読んだカンパンには、たはこが一番多い。それは大体店がちらばっていて、どこの子どもでもそれを見られるからだと思う。

(1)父母の学歴と考え方

古い教育を受けた人の方が入学までに字を知っていなければこまる、また幼稚園で教えてほしいと希望する者が多い。

(2)家庭保育児は、幼稚園に行った方が今よりよく覚えるだろう

と言うのが多い。

結論 文字を知ることにより、言語生活が豊かになり、絵本を通じていろいろの知識を深めていく。それ故、よき環境を作り、子どもに興味のある時をよく知りその時期を上手につかみ、子どもを伸ばしてやるのが、母親、保育者に与えられたる大事な役割であると思う。(図表省略)

農村における児童の生活

日本女子大学 児 玉 省
亀 田 紀 子
高 神 弘 子

本研究は、過去四か年にわたっておこなっている農村児童の興味、態度、社会観、人生観、対人関係などの研究の一環をなすもので、本発表では、対象農村として八ヶ岳山腹と、高松市郊外の一村の子ども、小学四年より中学二年に至る両地とも約二百名の子どもを取り上げて、質問紙法によって調査し、他方、質問結果の信頼性を裏打ちするために両地で子ないし十五軒の農家を訪問して一、二時間の観察および面接調査をおこなった。八ヶ岳農村は寒冷地、高松郊外は温暖地農村の例として取り上げた。

(1) 八ヶ岳の子どもの活動種類はごく限られた数少ないものである。他地域との接触が少なく、村や字に文化機関が少ないし、農家の手伝いがかんりの労力を要求していることかこの原因である。

(2) 農繁期には一日に七時間以上の農業労働その他に従事するものが約40%もあるのに対して、高松郊外では農繁期でも一時間位が